

Japa Newsletter (毎月1日発行)



掲載写真募集中

INDEX

1. コラム：疑似的な専門家（生成 AI）を手に入れた個人
2. 寄稿：共に生きる社会に向けて (星槎大学大学院教授 細田満和子)
3. 解説：データが語る東日本大震災の「いま」
4. 関連情報：時代環境・地方創生・COVID-19・社会的孤立孤独・社会システム
5. 連携団体及び Japa からのご案内
6. 読者の声：
 - 俳句随想 五七調の起源 ～リズム論事始～
(内閣府 地域活性化伝道師・(俳句)ARCセッション主宰 藤村望洋)
 - 第二の人生 生涯現役で行く その11 (作詞・作曲家 高橋育郎)
7. つぶやき (編集後記に代えて)

注：担当執筆者名の記載のない項目は、編集発行人(芝原 靖典)による。

※ 本 Newsletter は Japa 日本専門家活動協会が毎月 1 日発行の会員及び関係者向けの newsletter です。
1 ヶ月後に当協会の HP <https://japa-fellowlink.wixsite.com/japa/newsletter> に公開しています。

◆◆ Japa からのお願い ◆◆

社会課題（社会的孤立・孤独・ひきこもり等）を解決するハイブリッドシステム（人間 with AI）の開発・普及をスタートします。レベニューシェアで共創いただける IT/AI エンジニア（フリー、副業等）の方で、ご関心のある方は、Japa 事務局までご連絡ください。

1. コラム：疑似的な専門家（生成 AI）を手に入れた個人

(Japa 日本専門家活動協会 代表理事 芝原靖典)

生成 AI の個人利用が急速に広がっている。総務省「令和 7 年版情報通信白書」によれば、2024 年度に生成 AI を利用した経験のある日本人は 26.7%に達し、前年度 (9.1%) の約 3 倍に拡大した。20 代では 44.7%が利用経験を持つ。米国 68.8%、中国 81.2%、ドイツ 59.2%と比べれば日本の普及はまだ途上にあるが、日本でも、生成 AI が個人の生活・仕事・学習にわたる基盤技術として急速に定着しつつあると云える。生成 AI の活用格差とリテラシー格差が今後の最重要な課題となろう。社会的基盤化の初期段階にある今こそ、個人は向き合い方を問われている。

生成 AI が個人に及ぼす影響（個人として活用可能な領域・内容・制約等）は、大きく 9 つの場面に整理できる。①日常生活の最適化、②メンタルケアと内省、③仕事の生産性向上、④事業創造・起業・小規模経営、⑤学習・スキル習得、⑥知的生産、⑦創作・表現・遊びの共創、⑧市民参加・社会理解、⑨自己変容・キャリア設計である。いずれの場面においても生成 AI は「作業を肩代わりする道具」ではなく、「思考・試作を加速する補助装置」として機能する。

なかでも注目すべきは、事業創造・起業・小規模経営への作用である。従来、調査・分析・企画・ライティング・顧客対応は組織や外部専門家に依存せざるを得なかった。生成 AI はこれらの「疑似的な専門部署」を個人に提供し、起業前段階の検証コストを大きく下げる。OECD が 2024 年末に 7 カ国 5000 社超の中小企業を対象に実施した調査 (2025 年 11 月発表) では、生成 AI を使う中小企業の 65%が従業員パフォーマンスの向上を報告し、39%がスキルギャップ補完を、83%が人員需要に変化なしと回答している。生成 AI は「組織規模の差を圧縮する技術」として、着実に機能していると云え、個人としての働き方に大きな選択肢をもたらしている。

しかし、利便性の裏には横断的なリスクが伴う。NIST (National Institute of Standards and Technology) は生成 AI 固有のリスクとして、もっともらしい誤答の生成 (Confabulation)、プライバシー侵害、知的財産リスク、有害なバイアス、過信・擬人化を挙げる。WHO も医療・メンタルヘルス領域で AI を専門家判断の代替と見なす危険性を強調している。これらを踏まえ個人利用には五つの原則が必要となる。①機密情報を入力しない、②出力を必ず検証する、③著作権・利用規約を確認する、④思考そのものを放棄しない、⑤最終判断責任は人間が持つ、の 5 点である。この五原則はどの場面にも共通する最低限の基盤であり、省略は許されない。

生成 AI は「疑似的な専門機能」へのアクセスを与え、個人の可能性を広げる。だが、その可能性を現実の成果に変えるのは、検証・判断・説明責任を手放さない人間側にある。ILO が指摘するとおり、生成 AI の主な影響は雇用の全面代替ではなく職務の変容として現れる。今、個人に問われているのは「生成 AI を使うか否か」ではない。「どの場面で、どこまで任せ、どこから自分が責任を持つか」を明確にすること—それこそが、AI 時代を主体的かつ誠実に生きるための根本的な構えといえるのではないだろうか。使う側の知恵と見識が問われている。

補：本コラムの参考資料等は <https://shikumi-gunzo.hatenablog.com/>、バックナンバーは <https://www.japa.fellowlink.jp/column> に掲載

2. 寄稿：共に生きる社会に向けて (星槎大学大学院教授 細田満和子)

私は社会学を専門とし、医療・福祉・教育の領域を横断しながら、人びとの生きづらさや社会的排除、そしてそれに抗う実践について研究と実践を行ってきました。慢性疾患や障がいのある人びと、患者会やピアサポートの場、教育や専門職養成の現場に注目し、「支援される側／する側」という固定的な関係を問い直すことを一貫したテーマとしてきました。

とりわけ重視してきたのは、当事者が自らの経験を語り、意味づけ、他者と共有するプロセスです。そこでは、専門知や制度によって一方的に規定される存在ではなく、社会を構成する主体としての人びとの姿が浮かび上がります。私はそのような実践を社会的に記述し、理論化し、再び現場へと還元することを自らの役割だと考えてきました。

近年、日本社会において外国人排斥やヘイトスピーチ、排他的な言説が可視化されつつあることに、私は強い危機感を抱いています。これらの言説は、「治安の悪化」や「文化の違い」「社会保障の負担」といった言葉と結びつき、外国人という存在そのものを問題化する形で語られがちです。しかし社会構造の観点から見ると、そこには重要な歪みがあります。

とりわけ注目すべきなのは、外国人へのヘイトに満ちた言説の多くが、実際に外国人を隣人として日常的に知っている人びとではなく、外国人とほとんど接点をもたない、地理的にも心理的にも離れた位置にいる部外者によって発信・拡散されている点です。SNS や匿名的な言論空間では、具体的な顔や生活をもたない「抽象化された外国人像」が作り上げられ、不安や怒りのはけ口として消費されていきます。

この構図は、私が医療や福祉の領域で見てきたスティグマや排除のメカニズムとよく似ています。実際の当事者と関わらないまま、遠くからラベルを貼り、問題を単純化することで、複雑な社会課題があたかも特定の人びとの責任であるかのように語られてしまうのです。その結果、本来向き合うべき雇用の不安定化や地域コミュニティの希薄化、社会保障制度の歪みといった構造的課題は不可視化されていきます。



私はこれまで、海外の研究者や実践者と協働する中で、日本人として、あるいはアジア出身者として、明示的・非明示的な差別に直面する場面を見聞きし、また経験してきました。発音や言語能力を過度に問題視されたり、能力とは無関係にステレオタイプで評価されたりすることは、決して特別なことではありません。重要なのは、差別が抽象的な理念の問題ではなく、日常の相互行為の中で具体的に立ち現れる一方で、対話や協働を通じて関係性が変化するという点です。差別は固定されたものではなく、人びとの関わり方によって再生産も克服もされる社会的過程なのです。

私が考える共生社会とは、「同じになること」や「違いを消すこと」を目指す社会ではありません。違いが存在することを前提に、その違いを抱えたまま、日常生活をどのように共に成り立たせていくのかを、地域レベルで実践的に模索し続ける社会です。

実際の地域では、外国人住民と日本人住民が、学校、職場、自治会、医療や福祉の現場などで、試行錯誤しながら関係を築いています。ゴミ出しのルールや子どもの教育、言語の壁などは摩擦を生むこともありますが、同時に相互理解を深める契機にもなっています。重要なのは、外国人も日本人も、ともに地域をつくる当事者であるという点です。

専門職集団の一員として私が強調したいのは、外国人排斥やヘイトの言説が、現場から切り離された部外者の言葉として流通している一方で、地域の現場では当事者による共生の実践がすでに積み重ねられているという事実です。

専門職の役割は、こうした当事者の実践を可視化し、支え、歪められた言説に対して現場に根ざした言葉で応答することにあります。共生社会は、遠くから論じられる理想ではなく、具体的な他者と出会い、失敗を重ね、対話を続ける中で形づくられていくものです。私は今後も、当事者の声と実践に立ち会い、それを社会に伝え返す媒介者であり続けたいと考えています。



補：寄稿のバックナンバーは <https://www.japa.fellowlink.jp/professional> に掲載

3. 解説：データが語る東日本大震災の「いま」 (Japa 日本専門家活動協会 芝原靖典)

(1) 「一区切り」と「26,281人」の間にある現実

2026年3月11日、東日本大震災から15年が経過した。警察庁の集計によれば直接死者1万5,901人・行方不明者2,519人、復興庁が認定した震災関連死は3,810人に上り、合計の犠牲者数は2万2,000人を超える。道路は100%開通し、災害公営住宅は計画通り完成。岩手・宮城の復興局は今月末をもって廃止される。政府が「一区切り」を宣言するに十分な数字が、確かに並んだ。

指標	人数	出典
直接死者数	15,901人	警察庁 2026年3月1日時点、12都道県
行方不明者数	2,519人	警察庁 2026年3月1日時点、12都道県
震災関連死	3,810人	復興庁認定 2025年12月31日時点

しかし、同じ時間軸の中に、別の数字が存在する。2026年2月1日時点で、全国47都道府県・817市区町村に2万6,281人がいまだ避難生活を続けている。ピーク時(2012年5月、約47万人)の5.6%まで減ったとはいえ、15年を経てなお2万人超が故郷を離れた生活を強いられているという事実は重い。さらに決定的なのは、県外避難者の93.5%が福島県民であるという内訳である。原子力災害の影響が、地震・津波被害とは本質的に異なる時間軸で、いかに長期かつ広域に及んでいる。しかも、それは今後も超長期に及ぶ。

区分	避難者数	備考
全国計	26,281人	47都道府県・817市区町村
岩手県	291人	県内所在者数
宮城県	702人	県内所在者数
福島県	4,409人	県内所在者数
県外避難(福島→他県)	18,996人	県外避難者の大宗

(2) ハード100%・人口マイナス90%という逆説

インフラ復興の完了と人口動態の悪化は、正反対のベクトルを向いている。災害公営住宅29,654戸、防災集団移転宅地18,226区画、復興道路570km、被災鉄道全線―すべてが計画通り完成・開通した。これは紛れもないハード面での達成である。

だが、被災42市町村のうち実に約9割(38市町村)で、震災翌年の2012年よりも人口がさらに減少している。42市町村全体の総人口は震災前比で約26万4,100人(約10%)減少し、現役世代(15~64歳)の流出速度は全国平均の約2倍に達する。「器は完成した。しかし人が入らない」―これが15年後の被災地の実像だ。

なかでも福島原発周辺自治体の減少幅は凄まじい。富岡町は震災前比で88%減(約1,862人)、大熊町は87%減(約1,436人)、双葉町は86%減(約962人)。避難指示が一部解除された双葉町の実居住者は約180人で、登録人口5,220人のわずか3.4%にとどまる。除染が完了し、インフラが整備されても、医療・教育・商業といった生活基盤の再建、コミュニティの再生が進まない限り、帰還は現実的ではない。長期化するほど、さらに難しくなる。

「復興したまち」と「消えていくまち」が同時に存在するという逆説がデータとして刻まれている。

順位	自治体名 (県)	減少率	2026年3月時点の人口状況
1位	富岡町 (福島)	88.2% 減	15,842人 → 1,862人
2位	大熊町 (福島)	87.5% 減	11,515人 → 1,436人
3位	双葉町 (福島)	86.1% 減	6,932人 → 962人
4位	浪江町 (福島)	82.4% 減	20,905人 → 3,674人
5位	葛尾村 (福島)	74.1% 減	1,531人 → 396人
6位	飯舘村 (福島)	70.5% 減	6,209人 → 1,832人
7位	女川町 (宮城)	46.3% 減	10,051人 → 5,397人
8位	大槌町 (岩手)	40.4% 減	15,277人 → 9,112人
9位	陸前高田市 (岩手)	38.8% 減	23,300人 → 14,260人
10位	南三陸町 (宮城)	38.2% 減	17,429人 → 10,771人

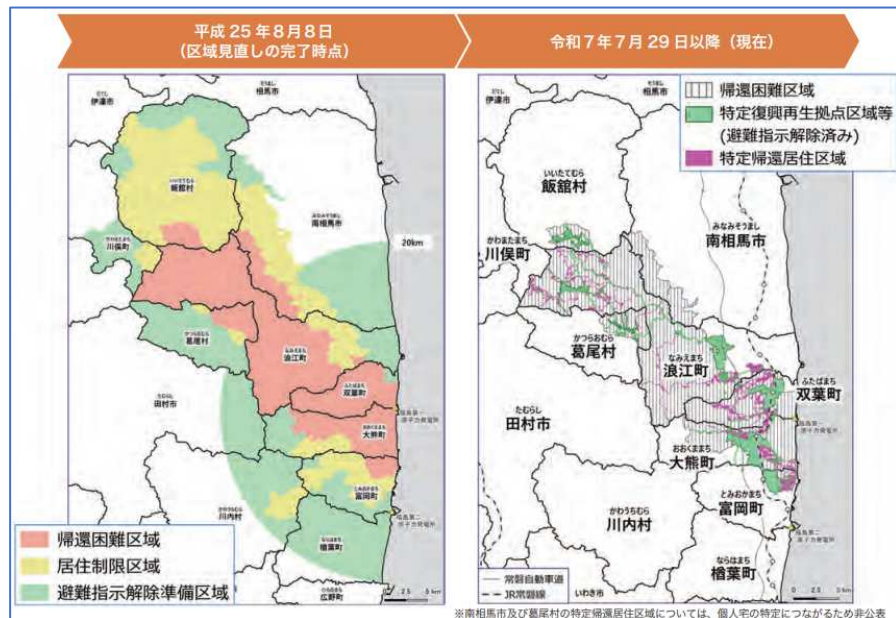
注：本データは、2026年3月現在の各自治体・県が発表した最新の推計人口および、2024年の人口戦略会議による分析に基づく概数である。

(3) 福島という特別な重さ

福島の問題が他の被災地と根本的に異なるのは、廃炉という終わりの見えない工程が続いているからだ。廃炉完了目標は2051年—あと約25年先—とされているが、その見通しは依然として不透明である。廃炉の本丸である燃料デブリの取り出しは、2回の試験採取でわずか0.9グラムを採取したにとどまる。残存する推計約880トンのデブリをどう取り出すかは、技術的にも未解決の問題であり、3号機の大規模取り出し準備だけで12~15年かかるとされる。汚染水は現在も1日約60トンが発生し続けており、ALPS処理水の海洋放出は2023年8月に始まったが、国内外の議論は続いている。

避難指示区域は2011年当初に福島県面積の約12%に設定されていたが、2025年時点では約2%

まで縮小した。しかし、帰還困難区域7市町村・309平方キロメートル（東京23区のほぼ半分）はいまだ解除されていない。政府は2029年までに「特定帰還居住区域」の避難指示を順次解除する方針だが、実際に住民が帰還できる環境整備は途上にある。



(4) 見えない傷—孤独死と心の病

復興予算が42兆円に達した一方で、数字に表れにくい傷が残り続けている。宮城県の公営仮設住宅における調査では、震災後6年間で82件の「孤立死」が確認されており、非高齢者男

性・アルコール依存傾向・無職無収入という三つのリスク要因が重なった人々が孤立しやすかったことが示されている。

被災者の心理的回復は、一般に思われているよりはるかに複雑で長期的な経路をたどる。震災 1 年目は避難所の劣悪な環境がストレスの温床となり、仮設住宅への移行後は一時的な安定が訪れるものの、4~7 年目以降も依然として心理的な不安定を抱える人が少なくない。住居の繰り返す変化、健康問題、そして社会的孤立の三つが、回復を妨げる主要な要因として浮かび上がっている。震災関連死 3,810 人のうち福島が 2,350 人と最多を占めるのは、こうした長期的・複合的な苦難の蓄積を反映している。

(5) 42 兆円の使途と次のフェーズ

15年間の復興予算累計は約41.7兆円に達した。その内訳を見ると、住宅再建・まちづくりが全体の32.6%（約13.6兆円）で最大だが、注目すべきは原子力災害対応の20.9%（約8.7兆円）という比重だ。除染・中間貯蔵施設・福島県内の避難者支援がこれに含まれており、復興予算の約2割が原発対応に費やされた計算になる。

2026年度から始まる第3期復興・創生期間（5年間、総額約1.9兆円）では、岩手・宮城復興局を廃止して福島に新拠点を集約するという組織再編が行われる。これは復興の重心が福島の長期課題に移行したことを示している。岩手・宮城の事業が一段落する一方で、廃炉・帰還困難区域・心のケアという福島固有の課題は、今後も（超）長期にわたって続く。

(6) 阪神・淡路との比較が示す構造的教訓

東日本大震災を1995年の阪神・淡路大震災と比較すると、日本の復興政策の構造的課題が際立つ。阪神・淡路では仮設住宅の入居がほぼゼロになるまでに要した時間は4年9ヶ月だったのに対し、東日本では15年後もなお2万6千人超が避難を続けている。規模の違い（死者数で約3.5倍、復興予算で約2.8倍）だけでは説明できない差がそこにある。原子力災害という「同時複合災害」の構造が、通常の復興プロセスに根本的な変数を加えたと云える。

(7) 4つの構造的課題と提言

データが示す15年の経験を踏まえると、今後に向けた課題は四つに集約できる。第一は「事前復興の制度化」だ。南海トラフ巨大地震等に備え、防災庁が標準的な事前復興計画の策定支援と財政・人材支援を一体的に提供する体制が必要である。第二は「縮小適応型復興モデルへの転換」で、人口減少を前提とした持続可能な地域設計へ政策パラダイムを切り替えることが求められる。第三は「政策評価と情報の透明性」の確保で、廃炉ロードマップや復興特別会計の進捗を定期的に公開・説明する義務を明確化すべきだ。第四は「記憶と知識の次世代移転」—15年間の復興実践が蓄積した教訓・ノウハウ・人材ネットワークを、能登等の新被災地と次世代に継承する「防災文化」の醸成である。

15年という歳月は、日本がハードの復興をやり遂げる底力を証明した。同時に、人口・コミュニティ・廃炉・孤立という「ソフトの復興」がいかに長く険しい道のりであるかを、数字が静かに示し続けている。ハード以上に社会的仕組みの問題である。

補：本解説の参考資料等は <https://shikumi-gunzo.hatenablog.com/>、バックナンバーは <https://www.japa.fellowlink.jp/column>

4. 関連情報：時代環境・地方創生・COVID-19・社会的孤立孤独・社会システム

世の中の動きが激しく、月刊で紹介するには時機を逸する状況となってきましたので、本「関連情報」については、Newsletter から分離させ、上旬（10日発行）・中旬（20日発行）・下旬（翌月1日発行）毎の状況を「旬報 時代のシグナル」として、よりタイムリーに関連情報をキュレーションして配信することに致しました。

サンプル版として、3月上旬・中旬・下旬の各号を別途、配信させていただきます。御笑覧ください。ご感想等頂ければ、今後の編集に反映いたします。

- サンプル版：旬報 時代のシグナル 3月上旬号（対象期間：03/01～03/09）
- サンプル版：旬報 時代のシグナル 3月中旬号（対象期間：03/10～03/19）
- サンプル版：旬報 時代のシグナル 3月下旬号（対象期間：03/20～03/31）

なお、今後、本旬報は Japa 会員（回避納入者）のみに限定して配信させていただきます。購読をご希望の方は、これを機会に、Japa の会員（一般会員、会費 3,000 円/年）になって頂ければ幸いです。

5. 連携団体及び Japa からのご案内

▼ Japa と連携団体・青山 Hicon による「研究会」の参加者募集

共同して、4月より、社会課題（社会的孤立・孤独・ひきこもり等）を解決するハイブリッドシステム（人間 with AI）の開発・普及をめざす「ひきこもり等支援システム開発普及研究会」をスタートします。当該分野の専門家・実務家だけでなく、広く、社会課題解決に関心のある方やレベニューシェアで共創いただける IT/AI エンジニア（フリー、副業等）方のご参加を歓迎いたします。ご関心のある方は、Japa 事務局までご連絡ください。

▼ Japa Newsletter 掲載写真の募集

Japa Newsletter の冒頭に掲載する写真を読者の皆さまから募集しています。掲載を希望する写真（著作権所有／フリー）がありましたら、画像 file をキャプション付きで事務局までお送りください。Japa Newsletter 編集仕様に則り掲載いたします。ただし、掲載希望多数等、事務局の判断で掲載できない場合がございます。

▼ Japa 日本専門家活動協会の会員募集

Japa は、会員（個人）と連携団体の方々の参加と協働により活動しています。Japa は、随時、会員〔正会員、一般会員〕を随時募集しています。
▶入会案内の詳細 <https://www.japa.fellowlink.jp/admission>

▼ Japa Newsletter 掲載写真の募集

Japa Newsletter の冒頭に掲載する写真を読者の皆さまから募集しています。

掲載を希望する写真（著作権所有／フリー）がありましたら、画像 file をキャプション付きで事務局までお送りください。Japa Newsletter 編集仕様に則り掲載いたします。ただし、掲載希望多数等、事務局の判断で掲載できない場合がございます。

▼ Japa 日本専門家活動協会の会員募集

Japa は、会員（個人）と連携団体の方々の参加と協働により活動しています。

Japa は、随時、会員〔正会員、一般会員〕を随時募集しています。

▶入会案内の詳細 <https://www.japa.fellowlink.jp/admission>

6. 読者の声

■ [俳句随想 五七調の起源 ～リズム論事始～]

(内閣府 地域活性化伝道師・(俳句)ARCセッション主宰 藤村望洋)

Japa Newsletter2026/03/01 号の「1. コラム：SNS・AI 時代の思索」を興味深く読ませていただきました。俳句をものとするものとして「俳句（17 音）・短歌（31 音）は、少ない言葉に豊かで深い意味を凝縮する技法を万葉集以来、千年以上かけて磨いてきた」に一言。

文字の無い大和言葉の大和唄を漢字で可視化したのは万葉集でした。

それまでは、言い伝え（伝承）だけの大和唄が、縄文以来3万年、唄い続けられてきました。

文字が無いだけに、伝えることは、「唄」にしないと伝わらないので、文字の時代よりも、もっと日常的に頻繁に唄われてきました。その大和唄を、漢字で「翻訳した」ものが万葉仮名の万葉集です。

漢字の「翻訳」を、仮名を開発して、大和唄(大和言葉)の復権を果たしたのが古今和歌集です。これらのことを小論で書きましたので、以降、シリーズで紹介させていただきます。

(1) 翻訳

大谷翔平の飼犬「デコピン」は、「コーイケルホンディエ」というオランダ原産の犬種であるらしい。オランダで犬は「Blaf-blaf ブラフブラフ」と鳴くらしい。「カタカナにすると犬の鳴き声とは感じられないが、ネイティブっぽく発音すると犬の鳴く声に聞こえるような気がする」とのことである。「デコピン」は現在アメリカのカリフォルニア州にいるので、「Bow-wow バウワウ」と鳴いているのだろうか。大谷翔平が「デコピン」と共に帰国すれば、「ワンワン」と鳴くに違いない!?

猫も同じく、日本の「ニャーニャー」「ニャーン」に対して、フランスやオランダでは「Miaou ミャウ」、アメリカでは「Mew ミュー」、英国では「Meow ミャオウ」と鳴くらしい。この違いはどこからくるのか?

これらの鳴き声は、すべて「オノマトペ」の1種に分類される。オノマトペには3種類あって、自然界の音を表す「擬音語」（雨のザーザー、雷のゴロゴロなど）、物事の状態を表す「擬態語」（めろめろ、キラキラ、キュンなど）、人や動物の声を表す「擬声語」（ワンワン、ニャーニャー、オギャーなど）に分けられる。これらのオノマトペは、「ある物を何かに」「擬す」ということである。「擬す」とはつまり「なぞらえる」ことである。「英語を

日本語になぞらえる」ことが「翻訳」だとすれば、各国が犬語や猫語をそれぞれに「翻訳」した結果が、鳴き声の違いになったと考えられる。

それぞれの国々で、言語特性や歴史などを背景に「翻訳」したのである。「音」を「翻訳する」とこのような「違い」がでてくることになる。ここでは「翻訳」には「違いがある」ことを押さえておきたい。

(2) 万葉集は「翻訳」である

万葉挽歌の史的・研究と万葉文化論を専門とする奈良大学文学部・上野誠教授による天平5年（733年）の遣唐使の物語「天平グレート・ジャーニー」に次の一節がある。「読み書きのできない人びと同士が伝言をする場合、短歌や比較的長い長歌などを作って、使者に覚えてもらい、想いを伝えるということが多く、読み書きのできない人のほうが、じつは、よく歌を作ったのである」。

というか、文字のない5世紀以前の大和言葉の場合、「伝えたい」「伝承したい」とすれば「唄」しかなかったのである。発信人にも、使者にも、受信人にも、あるいは時代を超えた世代へも、共通の覚えやすい一定のリズムを持つ「唄」が必要であった。この文字のない「唄」の集積が万葉集の全4,516首の内の半分近い2,100首の「詠み人知らず」となっている。では、この大和言葉の「唄」を、万葉集としてどのように編纂したのか？

万葉集は、飛鳥時代の629年頃から奈良時代（天平）の759年までの約130年間の「唄」を、大和言葉の発声音に、漢字の音（おん）を当てて書き取って採集し、その漢字の当て字の「唄」を、漢字・漢詩・漢籍に詳しい当時の超エリート官僚が「翻訳」したものである。実際の「翻訳された」「大和唄」を見てみよう。

（原 本）麻可奈思美 佐祢尔和波由久 可麻久良能 美奈能瀬河泊尔 思保美都奈武賀
（巻14東歌3366）

（訓 読）ま愛しみさ寝に我は行く鎌倉の水無瀬川に潮満つなむか

（現代語訳）本当にいとしいと思うので、私は共寝に出かける。鎌倉の美奈の瀬川には、潮が満ちているだろうか。

「東歌以外では、共寝に対する表現は『逢心』』『思心』である。それを『寝る』とストレートな表現をするところに、都人は、（荒々しく直截な）エキゾチズムを感じて、万葉集に再録したと考えられる」（二松学舎大学文学部・塩沢一平教授による市民講座SHOWNANアカデミア資料「万葉集を楽しむ」より）。筆者は鎌倉在住なので、「可麻久良」の句を例にあげさせていただいた。

(3) ことのはじまり

そもそもなぜ万葉集とかかわるようになったのか？ きっかけはちょっとしたひっかけりであった。

妻が逝って、その想いを投句していたら、句会仲間が優しくほめてくれて、妻恋句は50句近くになった。50句ならば角川俳句賞に応募したらどうかということになり、句会仲間と一緒に推敲やら添削を手伝ってくれていた。その中の1句、

「猫探す妻の居場所や二月尽」

多くの仲間は「猫が探す」「妻の居場所」と読んだ。しかし「猫を探す妻」の「居場所」と読めなくもないとの意見が出た。素直に読めば「猫が探す」となり、理屈を言えば「猫を探す妻」と読めなくもない。この素直と理屈の差は何であるのか、この疑問が本稿の「きっかけ」となった。

素直に体内からの五七調リズムで読む方法と、理屈で「文字」を読む方法との違いは何で、何処から来たのか？文字を持たない大和言葉の五七調の「唄」が、文字（漢字）と出会って最初に編纂されたのが万葉集である。この大和言葉の「唄」と漢字（理屈あるいは論理）の出会いについては、万葉集を勉強してみるしかないか。 (続く)

■ [第二の人生 生涯現役で行く その11]

(作詞・作曲家 高橋育郎)

17年には小学校で童謡を歌う

日本こども文化学会の出張授業として、墨田区立の小学校にて童謡を歌った。二年にわたって行われたが、児童たちは「童謡小父さん」と親しみをもって出迎え、帰りは玄関まで見送ってくれた。

また、町田市の三平邸音楽サロンで、「西洋音楽事始め」を語った。サロンには三年ほど通った。三平さんは童謡協会の役員で、私の詩「おたまじゃくしが蛙になった」に作曲くださった。それから19年、瀬沼克彰編集「超団塊世代の余暇哲学と実践」に、私の「歌唱指導の人生」が載った。更に、この頃相次いで3冊の本に私の一文が掲載された。まずは詩集「旅の唄」。ここに私の「人生という旅おして」が載り、次に「私のエコライフ」に「雪持ちの竹」が載り、それから、「私たちは生涯現役！『もし、77歳以上の波平が77人集まったら？』」に「わが人生を豊かに彩る奇跡の生涯現役」が載った。

また20年8月に、NHKと日本テレビから「みかんの花咲く丘」のことで、問い合わせを受ける。更に日本テレビの早起き番組「人生の達人」に電話でインタビューを受け「朝だ元気で」（朝だ 朝だよ 朝日が昇る）を歌った。

21年4月にCDチャリティーコンサート「この地球に緑いっぱい」を

合気道家・二見健吉氏（春風会を主宰）の要望で、日本橋公会堂にて開催。

二見氏はゴミ砂漠を緑化しようと取り組んでいる、ある日本人を知って共鳴し、自分も緑化しようとの思いに駆られ、資金調達のためチャリティーコンサートを企画し、私に協力を呼び掛けてきた。私は日本橋社会教育のホールを申し込んだが、空いている日がなく、日本橋公会堂に振った。出演は、たいらいさお、稲村なおこ、舞踊家・里見香華、春風会、私の歌う会。会場は大入り満員だった。

ロビーで基金集めのため、CDアルバム「春風に謳う」を発売したが、目に付く場所から離れていたため大して売れず、残念ながら失敗に終わった。当日のステージは、どなたかがビデオを撮って頂いた。

二見氏は再度の開催を試みたが、健康そのものの彼が、思いもよらない癌に侵され、築地社会教育会館で小型版をやったが、それが最後で亡くなった。「春風」という月刊誌を出していた

が、人格者でその死は悼まれてならない。葬儀には山本会長と出掛けた。葬儀場に、私が頼まれて作った「春風に謳う」が流れていた。

横浜開港 150 年祭に出演

LVC 代表からの要請を受けて出演をした。横浜といえば、母方の曾祖父が横浜の発展に貢献し、その功績は「横浜の人」と著者に依って紹介されている。

そうしたわけで代表からの要請は嬉しかった。しかし、幕があげれば、実に難航続きになって、人生の苦渋を飲まされたのだ。

まずは赤レンガ広場で、大々的イベントを開催することになり、私は近くの事務所に出かけ、担当と相談した。ここでは有料の音楽祭をしようという話だったので、早速童謡協会へ電話して、童謡歌手による童謡祭を考え連絡した。ところが市民からは予算の使いすぎだといったブーイングが高鳴り、市長が降板、結果は山深いユーラシア動物園近くの広場で行うことになった。駅から離れていて不便極まりない。童謡協会には大変なご迷惑をかけてしまった。

さて、ユーラシア動物園の会場は、屋根付きの大ホールと、もう一つ、ステージだけは屋根付きの二つがあった。時期は8月上旬だったが、中旬に繰下げられた。私は屋根付きで出ることが決っていたのだが、直前になって、ある大学教授が入り込んで、私は屋外に放りだされてしまった。真夏の炎天下では、人は集まらない。結果は10人ほどの人が汗を拭きふき、見るともなく雑談している有様だ。しかも、直前になって児童ダンシング・チームがやらせてくれとLVCに頼み込んできて、私の前にダンスをやったが、終るや早く、挨拶もないまま帰ってしまった。その後、私はステージに立ち、お話しと歌をやったが、見る人も聞く人もなく、空しいものだった。

二日間にわたって行われ、翌日は屋根付きホールで5分以内と限られて歌うことになったが、地元の児童合唱団が突然私の前になって時間を超過した為、いざ歌おうとしたら時間切れになったからヤメと手を振られ、皆の笑いものになった。踏んだり蹴つたりの、今でいうハラメントだ。まさに「人生いろいろ」の苦渋を味わった。

実は、この150年祭、当初は博報堂が後援してくれた。LVCで打ち合わせ中に電話が来て、博報堂の担当者は帰ってしまった。聞けば赤レンガ前が駄目になったからだった。

博報堂は、私が国鉄在職中、広報誌の編集の件でお世話になったり、平井駅と錦糸町駅でオレンジカードを作ったとき、お世話になって以来のお付き合いだった。

青い空はいつもある

22年12月。明治薬科大学混声合唱団定期演奏会で、私の長大な詩に童謡協会の渡邊玲子さんが作曲され歌われた。よくもこんな長い詞に作曲したものと感謝感激ひとしおだ。

最初は、清瀬市の本校で歌われた。校庭の広さに驚いた。指揮は船橋ハーゲンメンネルコールの大野晋先生で、当合唱団の青木さんが紹介してくれた。青木さんは国鉄合唱団の先輩だった。渡邊さんと私は招待された。渡邊さんは、事前の練習でピアノ伴奏の学生に若干の手ほどきをした。

いざ本番になると、場内に感激ですすり泣きの声が聞こえた。終わったときの拍手の凄まじさ、なかなか終わろうとしない。

さて帰えろうと廊下に出ると、青木さんが眼がしらに手をあて、声もなく去って行った。大学では CD を作成し、後日送られてきた。

その後、あるコンサート会場で唄われ、更に 23 年、日野市民合唱祭で歌われ、この時は私の詩で渡邊さんが作曲の「ざくろ」が女声二部合唱曲に編曲されて、同大学合唱団によって歌われた。「ざくろ」は、このころ「童謡祭」で歌われた。

ところで、渡邊さんと白川さんは同じ尚美学園短大で教授をされた。渡邊さんは、その優秀さが評価されて、ニューヨーク・ジュリアード音楽院へ留学した。ピアニストであり作曲家だ。それから「ざくろ」は 23 年、東京都児童作曲コンクールの課題詩になった。発表会は千代田区で行われ、私は会場に招かれ挨拶をした。 (続く)

7. つぶやき (編集後記に代えて)

いよいよ 4 月、新年度が始まった。コロナ禍で過去のしがらみ・よどみが露呈し、リモートワーク等近未来を体験し、昨年度 (2025 年度) から顕在化し始めた新たな時代への変容が、本年度 (2026 年度) に本格化すると思わせる状況が続いている。SNS が情報の受発信のパワーバランスを変え、生成 AI がビジネスモデルや戦争の戦い方を一変させている。「力の正義」がそれを加速している。いまや、2, 3 年前の情報、常識が通用しない。マインドチェンジが必須となっている。新たに発刊する「旬報 時代のシグナル」も生成 AI を活用しながら、そうした構造的変化にかかる情報を元に編集するが、果たして生成 AI を使いこなせるか、……。

編集発行人：Japa 日本専門家活動協会 代表理事 芝原靖典
発行元：Japa 日本専門家活動協会 <http://www.japa.fellowlink.jp/>
問合せ・連絡先：info@japa.fellowlink.co.jp